

Rev.6.12 2018.11.27

# 「最後の道学館教授」

—秀実学校の基礎を築いた永井鐵太郎の伝記—

Mignon Minoru Mazda 松田 實

## 献 辞

故・永井鐵太郎勝和および故・永井勝尚御兄弟  
並びに御係累の御冥福をお祈りする。

## 謝 辞

本文章作成のための調査に対し、以下の組織及び個人の御協力を  
いただいた。御協力に対し、心から感謝を申し上げる。

(順不同)

岡山県立図書館・岡山県津山市立図書館・岡山県久米町立図書館

岡山県久米町立秀実小学校

神奈川県小田原市立図書館

群馬県立文書館・群馬県館林市立図書館

島根県浜田市立図書館

田林吉弘先生（岡山県久米町）・神山典之先生（島根県浜田市）

## 第一章「館林時代」

このお話の主人公である永井鐵太郎（ながい・てつたろう）は、現在の群馬県館林市にあった上野国・越智松平家館林藩の家臣で、大小姓席兼御料理人を勤めていた永井茂兵衛勝明（ながい・もへえ・かつあき）の長男として、文化3（西暦1806）年に館林で生まれた。諱（いみな）を勝和（かつまさ）、通称を鐵太郎という。

いずれにせよ江戸時代のことであるから、士農工商という身分制度によって、武士の子供はだいたいが武士になるという社会のしくみに従って鐵太郎は育てられたと思われる。細かい話は当時の資料がないので筆者の推測となるが、館林藩の料理役である父親の才能を受け継いだのと、当時の社会の仕組みにより、料理を中心とする分野に興味のある子供として成長していったのではないかと思われる。その結果からか、文化14（1817）年、12歳（数え年、以下同様）から藩の料理方を修行し、二人扶持〔注1〕となった。

越智松平右近将監家の「明細分限帳」によれば、料理方で努力を続けた鐵太郎は、文政5（1822）年、17歳で徒士（かち）に昇進し、四両二人扶持に昇給された。また、文政11（1828）年には、23歳で中小姓席（ちゅうこしょうせき）に昇進した。そして天保元（1830）年、25歳で永井家の家督を継ぎ、六両三人扶持となった。父親が8月に五十五歳で病死した為である。

鐵太郎の興味は料理だけに満足せず、山崎闇齋（やまさき・あんさい）〔注2〕の門に入り、儒学の一派である山崎闇齋派の朱子学（しゅしがく）を学んだ。やがて学問の才能も認められた鐵太郎は、天保5（1834）年、29歳で家中講書購読世話役〔注3〕となり、館林藩の武士の子弟が通う学校「道学館」でも勤務することになった。

天保7（1836）年、当時の藩主松平齊厚（まつだいら・なりあつ）が、現在の島根県浜田市にあたる石見国（いわみのくに）浜田へ領地替えとなったので、33歳の鐵太郎は、一家で浜田へ移った。これより後の鐵太郎は、石見国浜田藩越智松平家の家臣と呼ばれることになる。

## 第二章「浜田時代」

前述の「明細分限帳」によれば、鐵太郎は道学館教師としての活躍が認められたもようで、浜田へ移住してから2年後の天保9（1836）年、中役人席（ちゅうやくにんせき）となり、八石三人扶持を支給されることになった。また、その後も努力と経験を認められた鐵太郎は、天保10（1839）年に、34歳で九石三人扶持、弘化元（1845）年には39歳で十石三人扶持と順調に出世している。

江戸時代の頃は現代と違い、人々の寿命が短かったので、だいたい40歳を過ぎれば、そろそろ年寄りと呼ばれるような状況であった。嘉永3（1850）年、45歳になった鐵太郎は、近習席（きんじゅうせき）・家中講書購読指南役兼道学館主任教授となり、浜田藩の子弟教育のみならず、浜田藩の侍全体を指導教育するという重要な役目についた。

そろそろ江戸時代も終わりに近づいた安政3（1856）年、51歳になった鐵太郎は自分自身で名目上の領地を持つ御給人席（ごきゅうにんせき）となり、十二人扶持を支給され、藩の重役としての責務を担うことになった。更に安政6（1859）年には、54歳で常上下席（つねかみしもせき）となり、江戸屋敷での勤務になった。

明治になってから出版された「濱（浜）田会誌」によれば、『このころ、各種の料理に妙を得て名声が高く、「浜田藩の料理人・永井」と云うと他藩にも聞こえており、宴会ではお客様に呼ばれて面会を許され、しばしば引き出物をいただいた』と伝えられている。一般的に武士は「文武両道（を磨く）」ということを重んじるが、鐵太郎は学問と料理の双方の分野で自分自身を磨いたのであろう。

鐵太郎が58歳になった文久3（1863）年、浜田藩は日本海側の海岸を防衛することが、日本のためにも、また藩のためにも重大だということを知り、海岸を防衛する砲台を築くとともに、大砲の技術を進歩させた。この時浜田藩は、鐵太郎に上野常左衛門（うえの・つねざえもん）、柄本司（えのもと・つかさ）らと共に海岸防備指揮役を兼務させ、十五人扶持の支給を決定した。

そうこうしているうちに、時代は幕末から明治への変革期を迎えようとしていた。慶応2（1866）年6月、長門国（ながとのくに）萩藩（はぎはん）・毛利家が、軍隊を山陰海岸沿いに京都へと進めようとした。この時、浜田藩の藩主松平武聡（まつだいら・たけあきら）は、第15代将軍徳川慶喜（とくがわ・よしのぶ）の実の弟であったことから毛利藩の軍隊を阻止する役目となり、歴史でいうところの第2次長州征伐の戦（いくさ）となった。

しかしながら、時代の流れはどうにも止めようがなく、浜田藩は大木原関所、益田及び大麻山で戦いに敗れ、浜田城下も陥落寸前となった。同年7月、敗色濃厚となった浜田藩は、自ら城を炎上させて全員退去し、出雲国松江を経て今の岡山県北部にあたる美作国にある久米郡を中心とする浜田藩の領地内に移動することを決定した。

鐵太郎も家族全員を連れて現在の久米郡久米町桑上へ移ることを余儀なくされた。これは現在でいうところの戦争難民と考えればよいのだろうが、鐵太郎が一家で浜田へ移ってから30年の月日が流れていた。

### 第三章「鶴田藩時代」

本拠を移動した後の浜田藩は、現在の御津郡建部町にある鶴田（たづた）というめでたい地名をとって鶴田藩と名乗ったが、藩主の家族や重臣の本拠は、現在の久米町里公文を中心とする久米町南部の倭文（しとり）地区に置かれた。当時の久米郡は、大きな難民キャンプとなったわけで、当初はこれを見物にくる人々があったという記録が残っている。

戦いに敗れたとはいえ、藩士や子弟の教育に力を注いできた鶴田藩は、鐵太郎に引き続き学文指南 兼 下目付役の任務を与えることとした。鐵太郎はこの時62歳で、もう老人と呼ばれる歳になっていた。

時代は明治に変わって、版籍奉還（はんせき・ほうかん）が行われたが、明治政府の支配体制が整ったのはもう少し後のことであり、社会の仕組みがすぐに変わったという訳ではない。浜田藩が倭文地区へ移ってまもなく、当時の桑上村にあった岡田英太郎氏邸の一部を借りて藩の学校「道学館」が再開され、鐵太郎は学校教授（教頭）に任じられた。彼は既に64歳を迎えていた。

「濱田会誌」によれば、学校監督は藩の重役たち10名が兼務しており、これは現在の教育委員会に相当するものであろう。鐵太郎は、山田元春（やまだ・もとはる）と二人で教頭職に任命されているが、実質的には現在の校長職だとも考えても差し支えないのではないかと筆者は考える。

余談であるが、山田元春は鐵太郎より3歳年下で、現在の久米郡中央町打穴（うたの）地区などにあった分校（支校）を任されていた。山田元春は、その後錦織（にしこり）地区に啄成校（たくせいこう）という塾を開き、これが後の厚生小学校の基礎となった。

昭和10（1935）年発行の「濱田町史」によれば、明治3（1870）当時、鐵太郎は5人家族で桑上村宮さこ（さこは土へんに谷）に住居があり、身分階級は中士上等、俸給は十七人扶持となっている。この住居についてはきちんと確定できないが、久米町桑上の傍示（ほうじ）地区に「岡田屋敷」と呼ばれる土地があり、鐵太郎は、その屋敷で岡田氏と同居していたのではないかと筆者は考える。

明治4（1871）年、廃藩置県（はいはんちけん）が行われ、旧藩主の松平武聡は明治政府の求めに応じて上京した。しかし、前述の濱田町史によれば、鐵太郎は「武士は二君に仕えず」と覚悟して、新政府の登用には応じなかったとのことである。この年、本校・支校合わせて80人の生徒が学んでいた道学館も閉鎖となった。鐵太郎66歳の時のことである。鐵太郎は、おそらく最後の責任者として残務整理にあたったに違いない。

そしてその5年後の明治9（1876）年、12月25日、鐵太郎はその生涯を静かに終えた。墓碑からは「永井和男之墓 此作州鶴田藩永井勝明長子和男墓也 明治丙子十二月廿五日 没年七十一 葬桑上村岡田氏佛域 福田下村真光寺 浜田賢篤院」との文字が読みとれる。

ここで鐵太郎一家の消息は歴史から消えてしまうのであるが、筆者に一つの私見があるので、以下にそれを披露しておく。事の虚実については、後年の研究を待ちたい。

#### 第四章「秀實学校」

明治7（1874）年から翌年にかけて、津山の鶴山（かくざん）城が取り壊された。その城の廢材を用いて現在の久米町立秀實（しゅうじつ）小学校が建設され、明治8（1875）年6月竣工となった。学校名「秀實（秀実）」の由来であるが、備中高梁の儒学者、山田方谷（やまだ・ほうこく）の命名とされている。ただし、山田方谷は「たまたま通りかかったので校名の命名を依頼した」〔注4〕と伝えられているが、筆者にはどうも納得できない。

山田方谷は、永井鐵太郎と同時代の儒学者で、備中国（びっちゅうのくに・今の岡山県西部）高梁藩の再興に功績が大きかった人物として、鉄道伯備線の駅名になるほど高名な人物である。彼は、明治になってから、岡山県備前市にある備前国池田藩の学校「閑谷（しずたに）学校」の再開に貢献し、実際に閑谷で講義も行っている。

山田方谷自身の塾は、明治3年から現在の阿哲郡大佐町小阪部にあったが、そこに鶴田藩から留学した者もいた。記録によれば、その中の一人、河鱒俊策（かわばた・しゅんさく）は「監講」という役目を任されていた。河鱒は、もともと道学館の筆頭教授であり、現在でいうところの「客員教授」として招かれたのではないかと筆者は考える。

あくまでも私見だが、山田方谷が明治8年2月、閑谷学校へ出かけた時、出雲街道（現在の国道181号線）を津山市付近まで歩いて、あとは吉井川を下る高瀬舟で移動したとするならば、途中で少し寄り道をして、「道学館」の教授たちと意見交換をしたとしても不思議ではない。

道学館の教授であった河合丈造（かわい・じょうぞう）は、その後道学館の建物を引き継いで官諭社（かんゆしゃ）という塾を開き、これが「試学校（しがっこう）」という予行演習を経て秀実学校へと発展している。

すなわち、山田方谷は「たまたま立ち寄った」のではなく、弟子の河鱒や河合、それに彼らの教師であった永井鐵太郎たちと学識や意見を交換するために倭文地区を訪れたと考えるのが合理的ではないかと筆者は考える。

あるいは、訪問先の鐵太郎との会話で、位置的に目の前で建設中の小学校に関する話題にヒントを得た山田方谷が、求めに応じて「秀實」の校名を命名したと考えるのは、ロマンチック過ぎるかもしれないが、一つの可能性として排除できないと筆者は考える。

鐵太郎が亡くなったのは、秀実小学校開設からちょうど一年半後であるので、新しい時代の教育を見聞きすることもあったろうし、また、もしかすると当時の地元在住知識人として、学校運営にいくばくかの助言と協力をしたのかも知れないと筆者は考える。

## 第五章「久米郡魂」

さて、前述の浜田会誌に、「濱田藩の教育に関する貢献」と題した、村島渚（むらしま・なぎさ）氏の報告文がある。村島氏は当時の久米郡佐良山小校長や加美小校長を歴任し、その後、丹波地方（現在の京都府西部）へ移られた人である。

その村島氏いわく、「（校長を務めた）その頃私は旧浜田藩士が久米郡地方の教育に貢献したことが大きく、その感化がよく浸潤（しんじゅん）して、久米郡の教育並びにこれによって薰陶（くんとう）された久米郡の人々には、他の地方とは一種変わった風格があって、たしかに久米郡魂といったような尊いものがあることを感じていた」とのことである。

その記事によれば、佐良山小学校の前身、明道小学校の校長をしていた旧藩士の棚橋啓（たなはし・けい）先生は、娘さんが重病でも学校を休まず、危篤状態に陥ったと近所の人々が学校へ走っても「この授業（修身：道徳教育）がすんでから帰る」と言い、先生が帰った時には既に娘さんは冷たくなっていたとのことである。また、同じく旧藩士の尾沼来次郎（おぬま・らいじろう）先生は、当時の倭文西村の身基校（旭小学校の前身の一つ）へ錦織の自宅から二里（約4キロ）の道を毎日徒歩で通勤するのに時間が正確で、沿道の人から「尾沼先生は時計だ！」と評判になったとのことである。

再度村島氏の文章を引用すると、「久米郡地方の人は教育程度が高く、道徳観念強く、人間に意気地がある。理屈っぽくて喧嘩っ早く、お上手（お世辞）がなく、添寄り（おし寄り）は至極悪いが、人間は親切で義侠心（ぎきょうしん）がある。これは武士的訓化をたっぷり受けた結果である。・・・（中略）・・・そして、相当につちかわれたこの尊き久米郡魂を永遠に活かして貰いたい。」とある。

これらの人々の、先生のそのまた先生が鐵太郎であることは明白で、彼は後の人から「久米郡魂」と呼ばれる、目に見えない影響を久米郡全域に残していると言えよう。時代遅れで田舎者的と言われるかもしれないが、久米郡魂はよい形で現在も残っているように筆者の身の回りを見て感じる時がある。

秀実小学校のインターネットホームページに、『「秀実」は、「論語」の子罕第九「苗而不秀者有矣夫。秀而不実者有矣夫」に由来するもので、「苗として植えられながら、穂を出さずじまいのものがある。また穂を出しながら実らないで枯れてしまうものがある。（若いうちにしっかり勉強するように）」と諭したものである。この精神は、明治・大正・昭和・平成とこの地に生き続け、多くの人材を世に送り出している。この「秀実の心」は今に受け継がれ、学業やスポーツに優れた成果を収めている。』とある。この「秀実の心」こそが村島氏の指摘する「久米郡魂」のひとつの良い側面ではないかと筆者は考える。

## 第六章「現代」

時代を現代に移して考えてみると、永井鐵太郎は、「名もなき藩の一人の教育者」としてその名前も忘れ去られて久しい。しかしながら、彼の残したものは秀実学校および久米郡の人々の気風であり、決して無視できるほど小さなものとは言いがたいと筆者は考える。

鐵太郎が没して後百数十年経つ現在も、彼の墓は、おそらく生涯を共に生活したであろう弟の永井勝尚（ながい・かつなお）の墓と一緒に、秀実小学校を見下ろす背後の丘の上にひっそりと建っている。時代は変わり、人々の生活も変わったが、学者そして教師としての鐵太郎の崇高な意志は、今日も子供たち、そして若い世代の成長を見守り続けているのだらうと筆者は考えたい。

了



## 注 記

1. 1人扶持とは、米5俵（17斗5升＝約315.7リットル＝約1両2分）  
2004年8月現在の金銀相場を元に計算すると、1人扶持＝約13.5万円  
同じく米穀相場を元に計算すると、1人扶持＝約7.5万円～約10万円
2. 山崎闇斎：諱は嘉。京都出身で寺に出家するが、その後敬義学派朱子学の谷時中（たに・ときなか）に師事。山崎闇斎派朱子学の祖となる。また、垂加神道の提唱者でもある。
3. 「三百藩家臣人名辞典」は、役名を「家中読書講書世話役」と表現し、久米町「須藤家文書」を底本とする「久米町史」は、役名を「家中講書購読指南」と表現している。
4. 「秀実小学校・インターネットホームページ」（現在は閉鎖）  
[ <http://www3.town.kume.okayama.jp/shujitsu/> ]  
【明治8年1月に学校の新築工事が行われている時、たまたま通りかかった備中の儒学者山田方谷先生によって「秀実学校」と命名され、同年6月25日に現在地に開校された。方谷先生の直筆の書は、今も大切に校長室に保存されている。（以下省略・本文参照）】

## 参 考 文 献

1. 「三百藩家臣人名辞典 第五卷(全七卷)」新人物往来社 ISBN 4-404-01573-9  
底本は「濱田会誌」(濱田会事務所)  
(神奈川県小田原市立図書館蔵書・群馬県館林市市立図書館蔵書)
2. 「濱田会誌 第二号～第七十四号」 濱田会事務所 明治20年頃～  
(群馬県立文書館蔵書)
3. 「日本系譜総覧(講談社学術文庫版)」講談社 ISBN 4-06-158322-0  
(筆者個人蔵書)
4. 「濱田町史」佐々木清一郎著 昭和10年1月6日発行  
一誠社 東京市麹町区九段四丁目八番地  
(岡山県立図書館蔵書)
5. 「久米郡誌」久米郡教育會編纂 大正12年8月1日発行  
久米郡教育會 岡山縣久米郡加美村大字原田千七百三十八番地  
(岡山県立図書館蔵書・岡山県久米町立図書館蔵書)
6. 「久米町史」岡山県久米町教育委員会内久米町史編纂委員会編集  
昭和59年2月1日発行  
岡山県久米郡久米町久米町教育委員会発行  
作州日報印刷 岡山県津山市皿九〇一の六  
(筆者個人蔵書・岡山県久米町立図書館蔵書)
7. 「はまだはん雑記」須藤喜六編著 昭和63年4月3日発行 津山朝日新聞社  
(館林市市立図書館蔵書・岡山県久米町立図書館蔵書)
8. 「維新の舞台だった郷土倭文 鶴田藩の物語」  
倭文地区歴史と文化を語る会 編並びに刊行 平成15年9月20日発行  
(筆者個人蔵書・岡山県久米町立図書館蔵書)
9. 「倭文志稿」寺坂五夫・槇茂雄 著者兼発行者 昭和27年9月1日発行  
(筆者個人蔵書・岡山県久米町立図書館蔵書[複写])
10. 「山田方谷全集」山田方谷全集刊行会 昭和26年発行  
(岡山県津山市立図書館蔵書)
11. 「山田方谷」朝森陽著 山陽新聞社刊 1995年4月発行  
(岡山県津山市立図書館蔵書)
12. 「松平右近将監家 明細分限帳」松平右近将監家家中  
(島根県浜田市立図書館蔵書)

## 後書き「世紀を超えた世代として」

筆者は、昭和33（1958）年、岡山県久米郡久米町桑上に生まれた。秀実小学校は、先祖代々からの母校であり、また同時に敷地を実家と隣接するという特別な関係でもある経緯はよく分からないが、筆者の少年時代には、小学校が実習用であろう小さな水田を持っており、筆者の実家から学校へ水稻の苗を供給して、先生方が田植えをしておられた記憶がある。

また、秀実小学校といえば、ピアノのロールスロイスと例えられる、日本に数台しかないベヒシュタイン社製のグランドピアノを持っていることで有名である。それは自宅から数メートルしか離れていない講堂兼体育館の中で使われており、筆者は生まれたときから「ベルベットの様な音色」を子守歌代わりに聞いていた。

さて、筆者と永井鐵太郎との関係であるが、本文にも書いた通り、秀実小学校を見下ろす裏山「丸尾瓢箪山（まるおひょうたんやま）」の鞍部（あんぶ：山の尾根の中窪みの部分）に、岡田家の墓地と隣接して永井氏の墓が二基、松倉氏の墓が一基ある。これまた経緯がよく分からないので誠に恐縮であるが、土地は岡田家の所有だが、これら三基の墓の日常管理は筆者の実家が行っている。

そこからもう少し山奥にある筆者の実家の墓地敷地内に、当時の鶴田藩家老、松倉丹後正道（まつくら・たんご・まさみち）の奥様「覺苑院」様のお墓があり、明治以来それをお預かりしているのと、実家所有の畑地が前述の岡田家墓地に隣接しているので、岡田家と松田家の先祖同士が話し合っ、て、前述の永井氏の墓所も合わせて、松田家側で管理するようになったのではないかと筆者は考える。

明治維新以来百数十年が経過した今、さすがの墓石も段々と風化が進み、一部は既に埋没寸前の状態にある。日常管理が行き届かないのは当家の怠慢といわれても致し方ないが他者他人様の墓所をそう簡単に工事する訳にもいかない。筆者としては、時宜をみて必要な調査をしておくことが、後世の為になると考え、この記録作りに取りかかった次第である。

調査の結果判明した大切なことや必要なことは、本文中にほぼ記述したと考えている。しかし、永井勝尚氏の事は資料が全く見いだせず、また永井家の御子孫の行方が全く不明なので、これをお伝えできないことを、筆者は誠に残念に思う。

永井鐵太郎が終生追求したであろう山崎闇斎派朱子学のテーマ「述而不作（述べて作らず）：古人のことを伝えるだけで、勝手に創作しない」に対して、この文章は多少反省する部分があるとは思いますが、いつの日か後世の役に立つならば、筆者としては幸福と考える次第である。

## 著作権表示

本文章の著作権は、日本国の著作権法（昭和44年法律第48号）に基づき、編集及び発行を行った「松田 實」が、これを有する。

(C) Copyrights All Reserved by Mignon Minoru Mazda : 2004-2013

## 著者略歴

- 1958（昭和33）年 岡山県久米町生まれ
- 1979（昭和54）年 国立詫間電波工業高等専門学校  
電波通信学科卒業
- 1979（昭和54）年 大手電機メーカーの関連企業に入社
- 2018（平成30）年 品質マネジメント国際規格専門エンジニア

神奈川県小田原市在住

## 主な記述

### ・工学部門

“Establishment of Open Network System for Information Exchange on Quality Management and Quality Control”（共同研究）

Proceedings of the Fifth China-Japan International Symposium on Industrial Management at Beijing, China 2000 [ ISBN 7-80134-708-0 ]

### ・その他

（本文章）